

## 編 集 後 記

原稿を査読して気がつきましたが、常連投稿者がいます。症例報告でも原著でも一編の原稿を完成させるまでには、多大の労力や時間を要しますが、常連の先生はどのようにこなしているのか興味が沸きます。編集委員会では一編ずつ査読結果を検討いたしますが、同じ投稿者が同じ日に何本も良い評価を得ているのを見ますとますます感心します。われわれ消化器外科医は日常臨床の仕事量の増加に驚きながら、しかしおそらく手術が好きだからという理由で体力の続くかぎり毎日毎日仕事をこなしています。臨床で感じた疑問の答えを考え、また集積した臨床結果を解析したり、さらには新しい臨床研究をしたり、逆に基礎的な検討を加えたりと、頭を使うチャンスは無限に存在します。ところが、あれもやりたい、これもやりたいと希望しても、光陰矢のごとしと言われるように、あっという間に時間が過ぎて行き、学術的な活動がつい低調になってしまいます。そのような環境にあっても消化器外科に関する新しい知見を論文にまとめて何編も投稿をする先生のエネルギーは本当に賞賛ものです。執筆の動機はさまざまでしょうが、少なくとも専門医や評議員の申請資格に本誌掲載の論文は大いにプラスとなります。

読みやすい文章は査読者にはありがたく感じます。私は他誌の編集委員を兼務しているため一か月に数十編の査読業務を仰せつかっていますが、すらすら読める論文はあまり手がかからず良いのですが、改善すべき点が多過ぎる論文にはつい悲鳴を上げたくになります。短気を出すと投稿者に申し訳ない返事をすることになるので、心を落ち着けて査読に取り組んでいます。当たり前のことですが、出版された暁に多くの読者に分かりやすく、正しく、有用な知見を提供できるような論文を投稿していただきたく思います。読者の目に触れる前には、査読者が読むのですから、読者にも査読者にも親切的な形に仕上げただけけると大変助かります。

常連投稿の先生は論文執筆に精通されているので上手に書き上げています。学術集会では応募数は一人一演題に制限される場合が多いのですが、幸い本誌への投稿には制限がありません。一編でも過去に採用となった先生もこれまでご縁のなかった先生も、症例報告ばかりでなく原著論文をどうぞたくさん投稿してください。皆様とともに消化器外科に関する最も質の高い邦文雑誌にしていきたいと思います。

(小澤壯治)